けいはんな 音楽コンクール

第3回 弦楽器部門 本選総評

今年も一生懸命音楽に取り組まれている皆さまの演奏を聴いて、身が引き締まる思いでした。
技術、表現、また感性の面でもレベルが高く、他の審査員の先生とともに驚き、喜んでいました。

何人かの方々に共通した「課題」や音楽に取り組む上での（私個人の）基本的な考え方を少々場違いかもしれませんが、全体の講評として書かせていただきます。

まず大きなテーマとして「自然な表現」について。
変化(コントラスト)やルバートなどで説得力のある演奏を目指すあまり、わざとらしく「不自然」な表現になってしまうことがあります。これは本当に難しいことで、私たちプロもいつも向き合っている課題です。
「やりすぎてみる」勇気というのは学習にあたってとても大切なのですが、「ではどのくらいなら自然か」という問題。「大胆な説得力」と「わざとらしい」の境目を徐々に見つけていきましょう。
「時間」の要素を使う場合、「急停止」「急発進」「急加速」「急ブレーキ」を避けると良いでしょう。
「音量」や「音色」を変化させる時は、それぞれのキャラクターをよく考え、その上で無理な接続をしていないか（「時間」が必要な場合もあります。）考えてみましょう。
自然のつくり上げた風景を人間が同じように作ることが困難なように、とても難しい問題です。

もう少し具体的な内容を以下に
・細かい動き（16分音符など）は一層丁寧に（ほんの少し時間がかかってもOK）トライしてみてください。ウィーンではAussprechenと習ったのですが、「細かい動きをしっかりとクリアに発音する」こと。難所をインテンポで走り抜けると逆に「不自然」に聞こえてしまうことがあります。川の流れが曲がりくねっているところで速度を落とすのと同じです。
また、細部を明瞭に演奏しようとする際、右手（特に弓の量、そして重さ）がそれの助けになります。左手に問題があると感じても、意外と右手が原因の場合があります。（逆もまたしかり）

・昨年の総評でも言及した「方向性」という大事な点ですが、もっと大胆に「ここへ向かう！」という意識が欲しいと思いました。フレーズがどこからどこへ向かうのか。今年は「どのように向かうか」という課題も追加したいと思います。どんなストーリーで、どれくらいのエネルギーで。そして到達したらフレーズをとじないといけません。そこにも「どのように？」があります。特に「倚音→解決音(ため息の修辞学)」があるときはそこまでしっかりと向かい、解決。それもまた、「不自然」にならないように。

・また、小さなモチーフで「方向性」を上手く表現できていても、モチーフ同士の脈絡がなくチグハグに聴こえることがあります。
モチーフが集まってフレーズになり、フレーズが集まってブロックになり、ブロックが集まって曲になります。つまり小さな視点での方向性を実現しながら、各モチーフの関係性を考え、曲全体としてどこに向かっているか(ブロックや曲の頂点を意識するといいでしょう)ということも表現する。それらを同時に実現していくことは非常に大変ですが、ぜひ目標にしてみてください。

・様々なコントラストも「自然に」「必然的に」表現しましょう。つまり、ただ「大きい」「小さい」や「長い」「短い」ではなく、『どのような表現』『どのような場面』というのをもっと一音一音にこだわっていけると理想です。音やフレーズの形を考えることもヒントになるはずです。

・重音は右手を柔らかく、ゆっくり円運動を利用して、(直線的にならないよう)丸く動かしましょう。
重さをしっかりのせる必要はありますが、決して音が潰れないように。
・いつも「いい音」に心がけ、もっと自分の音をよく聴くよう心がけましょう。「苦しそう」な音にならないように。ほとんどの場合、ボウイングに原因があります。特に残響の中で演奏する機会があれば反響してくる音を聴きましょう。基礎練習をするときも、難しいパッセージを弾くときも、いつも「いい音」を探し続けてください。
音には始まりがあって終わりがあります。その形をよく考えましょう。ずっと一定ということはないはずです。弓を上げることを怖がらないでください。弦の上で音を止めてしまうと音の終わりがぶつ切れになってしまう傾向があります。そういうことにこだわることで、自然といい音が見つかるはずです。

・時として「自分には少し難易度が高いかな」と思う作品にも取り組み、技術力を向上させていくことは確かに必要です。(メタ的ですが、コンクールではそういった曲の方が高い評価を得ることも多いかもしれません。)しかし、シューマンが「音楽座右の銘」で『やさしい曲を上手に、きれいにひくよう努力すること。その方が、むずかしいものを中途半端にひくより意味がある。』と述べたとおりです。あまり背伸びをしない選曲をすることで、音楽がもっと豊かになり、様々な表現方法を身に着けることができるでしょう。

・常に技術よりも表現を優先して考えましょう。「正しい音を弾く」ことに一生懸命になってしまわないように。なによりも作品の魅力や音楽の楽しさがお客さんに伝わるように。技術的なことは表現のための手段にすぎない、というのが私の意見です。
作品に向き合うとき、音楽的なこと（「こう弾きたい！」「ここが好き！」）から考えはじめるといいでしょう。

様々なことを書きましたが、上記の事は私個人の意見でしかないという事をご承知おきください。

これからも音楽を楽しみ、好きでいてくださいね。
皆さまの益々の成長を心から応援しております。

弦楽器部門 審査員長 堀江恵太